**第二十七回関西現代演劇俳優賞**

現代演技論研究会

２０２５/０３/０１

関西現代演劇俳優賞は

現代演技論研究会の主催事業です

関西の演劇界は魅力的な俳優を輩出しておりますが、俳優に対する賞は少ないと思われます。充実してきた戯曲賞同様、俳優賞の必要性を感じ、１９９８年に現代演技論研究会(同年発足)のメイン事業として、関西現代演劇俳優賞を設立いたしました。

演劇評論家の主催・出資する賞であり、表現者を選考するという行為は僭越ではございますが、継続的に行い、関西演劇界の活性化につなげることができれば幸いです。

尚、２００３年より、選考委員は太田耕人と九鬼葉子となっております。

また、２０２０年より、「男優賞」「女優賞」を「大賞」と改めました。

現代演技論研究会について

現代演劇の表現は多様化しており、演技についても実に様々な表現方法が見られます。しかし、演劇評論家は劇作や演出を評する言葉は持っていても、演技については曖昧な印象批評にとどまり、明確な言葉による表現を獲得していないように思われます。

このような状況を打破するため、三人の関西在住の劇評家、菊川徳之助(元近畿大学舞 台芸術専攻教授、国際演劇評論家協会名誉会員)、太田耕人(京都教育大学学長)、九鬼葉 子(大阪芸術大学短期大学部メディア・芸術学科教授)によって現代演技論研究会を１９９８年に発足いたしました。

特定の演技システムに統一されることなく発展した日本の現代演劇。その独特の演技方法を具体的な言葉で表現することを目指しております。

**現代演技論研究会**

菊川徳之助

太田耕人

九鬼葉子

片山加菜

第二十七回関西現代演劇俳優賞受賞者

**大 賞**(五十音順)

佐々木 ヤス子 　 （サファリ・P）

千田 訓子　 （万博設計）

**奨励賞**

該当なし

**関西現代演劇俳優賞要項**

１.対象

一年間(１月～１２月)に行われた関西の劇団、及びプロデュース公演に出演された関西の俳優を対象として、年間ベストアクター、アクトレスを選出する。

２.受賞人数および正賞・副賞

大　賞　　　　　　１〜２人　　正賞：賞状　　副賞：５万円

奨励賞　　　　　　１人　　　　正賞：賞状　　副賞：３万円

\*この人数は柔軟に対応したいと思います。

奨励賞は成長著しい若手を対象にした賞です。

３.選考委員

太田 耕人　　九鬼 葉子

４.選考会

年１回ないし２回

５.授賞式

毎年２月～３月

選 評

大賞

**佐々木 ヤス子(サファリ・P)**

**「悪童日記」（サファリ・P） おばあちゃん 役**

太田： 開演直前、佐々木ヤス子さんが現れた。前説をしている俳優の達矢さんの身体的特徴や服装を言葉で描写した。「彼は男性です。彼は髪の毛を刈り上げています。彼は筋肉質です。彼はグレーのシャツと黒いズボンを履いています」。

すぐ、達矢さんは双子の一人を演じ始める。観客は俳優が登場人物へと変貌する瞬間を目の当たりにし、劇があくまでも虚構であることを否が応でも意識する。いわゆる異化効果である。この仕掛けを有効に働かせるためには、佐々木さんが（まだ芝居が始まる前の）「素の俳優」を自然に「演じる」ことが必須である。

その「素の」佐々木さんが、芝居が始まると、がらりと変わって、双子のおばあちゃん――魔女と呼ばれ不潔で粗暴な老婆――の役を演じて強烈な印象を与える。このメリハリが見事だった。

『テアトロ』8月号の拙稿では、佐々木さんの演技を「腰を深く折り、ダミ声を使って祖母を好演した」と書いた。今思えば、いささか舌足らずだった。たしかに「腰を折った」姿は、腰の曲がった老人を象ってはいる。しかし、佐々木さんの演技は、フケ役のそれではない。むしろ、姿勢を低くして精力的に動き回る様子は、獲物を狙う獣のようだった。そうなると、「ダミ声」は、通常の人間とは違うことを表す、獣じみた、凄みのある声というべきだろう。近隣の住民から「魔女」と呼ばれていることを納得させる演技になった。

佐々木さんは、以前から「ギア―GEAR―」にドール役で出演しているが、山口茜さん主宰のサファリ・Pの一員である。2021年に山口茜・作／演出の２作品で、眼をみはる演技を見せた。「へそで、嗅ぐ」では意思疎通が苦手で、社会になじめない女性・原谷を演じて、コメディエンヌとしての才能を示した。また、未来の保育施設を描いた「PLEASE PLEASE EVERYONE」では、高い専門的知識を持ち、妥協を許さない職員に扮して、理知的なクールさを押し出した。原谷とは対極的な人物で、同じ俳優が演じているとは思えなかった。

今回の「おばあちゃん」役もまるきり違う人物造形である。作品ごとに登場人物を解釈して演じ分けるのが俳優の仕事とはいえ、これだけ異なる印象を与えるのは希有と言ってよい。切れ味鋭い解釈、没頭して役に成りきる能力、それを可能にする演技の抽斗。そうしたものが揃っているのだろう。

　日本では、どの作品に出ても、一目でその人だと分かるような俳優がもてはやされる。いつも似た役柄、似た印象なのである。むろん、アイドル的な人気を集めること自体は、決して否定すべきものではない。それもまた芸能というものの本質なのだから。しかし、役になりきり、作品世界に溶け込むあまり、「え、あの俳優さん出ていたの？」と思われる俳優も、同じ程度かそれ以上に評価されるべきだろう（例えば、映画を見終わって、あの役の人すごかったなと思って配役を見ると、名優ジュディ・デンチだった、といった経験が私には幾度となくある）。見てもすぐその人だとは分からないほど役になりきる…佐々木さんはそちらのタイプの俳優ではないかと思う。

九鬼： 知的で、身体がとても自由な俳優だ。「悪童日記」は、アゴタ・クリストフの小説が原作。戦時下にある国で、双子の兄弟を両親が祖母の家に疎開させるところから始まる。国境近くの鄙びた町にある汚れた家。祖母は二人に着替えもさせず、暴力を振るい、母から送られた服も売り飛ばす。双子は痛みや苦しみを感じないよう自ら鍛え、体験したことを日記に綴る。

俳優は皆、いくつかの役を演じ分けるが、佐々木ヤス子さんの老婆の演技が際立った。まず俳優自身の身体的特徴がほかの俳優によって述べられ、その俳優が人物を演じ始める。戦時下の虚構の物語が、現実と地続きであることを示す構成・演出。佐々木さんとして現れた時は、華やかで美しい。だが、そのまま役に入られた瞬間に、ふっと腰を深く落とす。ただそれだけで、野獣のような激しい気性の老婆像が見事に浮かび上がるのだ。さぞ壮絶な人生を送ってきたのであろう。その過去の時間性までも想像させる。

老婆は皺だらけで、顔も体も洗わず、袖で鼻をかみながら食事をこしらえることが、他の俳優によって語られる。佐々木さんは、それらを具体的に形象化する動作を最小限にとどめ、それでも、ただ立っているだけで、老婆の体臭まで伝わるようだった。

最初は子供を虐げる悪役として登場するのだが、不思議なことに、通常の悪役に覚える嫌悪の感情が、私には湧かなかった。当初、理由はわからなかった。だが何故か共感しながら佐々木さん演じる老婆を見ていた。そして後半、この老婆には強い信念があることが明かされる。収容所に連行される人々の前で、わざと自分の育てたりんごを落として、食べさせる。その行為により、彼女は暴行を受けるが、人権を守るという揺るぎない決意を支えに、高笑いする。双子達にも、今着る服は与えなかったが、未来を生きるすべを与えて死んでいくのだ。佐々木さんの演技のベースには、老婆の奥底にある不屈の意志が息づいていたのだろう。なぜか共感した理由が、ここにあったのだ。

無駄を削ぎ落とした演技で観客の想像力を最大限に広げる。知的な演技の構築は、恐らく共演する俳優達にとっても、頼りになる存在なのではないか。舞台を成功に導く俳優である。

特に「死ぬかどうかを決めるのはこのわしじゃ」という台詞が私の心に強く響いた。生き様とともに、死に様を決めるのも自分。死ぬまでの人生を全うする。限界状況下での人間の信念が逞しく浮かび上がった。

**千田　訓子(万博設計)**

**「夏の時間」(万博設計) 君枝役**

九鬼： 深津篤史さんが２６歳の時に執筆された戯曲。「大森真二を殺した」という電話が、木下と名乗る男から警察にかかるが、遺体は夏の長雨による土砂崩れで見つからず、木下も行方不明。そして１年後の夏。刑事の小山と名乗る男が大森宅を訪ねる。大森の妻・君枝は再婚で、最初の夫が木下。小山と大森、木下は幼馴染で、２０年来の友だった。そこに木下らしき男が現れる。

記憶と現実、過去と現在、生者と死者が交錯。３人の男の奇妙な友情を背景にした、心理ミステリー。

冒頭、君枝が小山を名乗る男をもてなす様は、一見平凡で親しみやすい女性像。いたずらっぽい微笑で刑事に酒を勧める。ごく普通の女性に見えるのだが、次第に妖艶になる。きっかけは、小山に出した漬物を素手でつまみ、ポリポリと美味しそうな音を立て、「行儀わる」と自分で笑い出すところ。小山も笑い、一気に二人の距離が縮まる。そして「何か面白いお話　聞かせて」とせがみ「あの人(木下)が帰ってくるかもしれませんし」と付け加え、彼を家に引き留める。したたかさが前面に表れ始めると、魔性の女が全開する。

内面が計り知れない謎めいた女性像を、魅力的に造形された。自立して働く女性の雰囲気は全くない。自分を生かしてくれる男を探す蝶のようだ。木下と大森が翻弄された心理が彼女を通して伝わる。

ぬるぬるとした夏の暑さが齎した狂気の世界を妖艶に映し出した。

太田： リリパットアーミーIIやラックシステムの作品に出演されているのを拝見して、安定した実力のある俳優だとつねづね感じていた。

この劇は夏の午後、旧家の座敷で、男女４人を巡って展開する幻想譚である。劇が始まってしばらく、二人の登場人物―君枝と小山―のやりとりから了解されるのは、次のような状況である…この家に住む君枝は前夫・木下と別れたあと、木下の幼なじみの大森と再婚した。ところが、（おそらく嫉妬から）木下が大森を殺害した。そこで刑事の小山が木下を逮捕するため、座敷に張り込んでいる。その小山もまた木下、大森とは幼なじみである。そのせいか、君枝は親しい友人と話すような口調で小山に接している。

勘のいい観客なら、何かおかしいと、初めからうっすら感づいたはずだ。そう感じさせるのは、君枝を演じる千田さんが漂わす、妖しいオーラである。千田さんの存在こそがこの劇世界を構築する要なのだ。

観客の目には、君枝のふるまいはいかにも不思議である。夫を殺した犯人が立ち寄るかもしれないのを刑事が見張っているにもかかわらず、君枝には緊張感がまったくない。刑事に酒を勧める段になると、艶っぽい表情を見せ、ますます謎めいてくる。

この劇を読みほぐすのはきわめて難しい。それでも作品の最後で、ヒントらしきものが呈示される。刑事の小山を名乗っていた男こそ、じつは殺人犯の木下であり、最近土砂崩れ現場で発見された死体が、どうも大森であるらしい…。

ここに至って謎は決定的になる。男が刑事・小山と名乗ったとしても、本当はそれが前夫・木下であることに君枝が気づかぬはずがない。ところが、君枝はなぜかその男をずっと小山として扱っている。この不合理さはリアリズムでは説明がつかない。

舞台上で演じられた出来事は、殺害犯・木下の悪夢のようなものだと、私は解釈している。木下の見ている「夢」のなかでは、「君枝」は豊満でなまめかしく、男を誘う雰囲気のある女である。小山（じつは殺人犯木下）はその物憂げで男好きのする姿態に魅了されている。しかし、こうした「君枝」のありようは、「夢」のなかで木下が妄想的に作り上げたものにすぎない（現実の君枝がどんな女性なのか、ほんとうのところはよく分からない。）

寝苦しい夏の夜、罪の意識に苛まれる木下が、「君枝」に取り殺される夢を見ている――そう考えるのがいいかもしれない。千田さんが演じた「夢」のなかの「君枝」には、幽霊のような不気味さ、恐ろしさがあった。

夢が舞台の上で具体的なかたちをとって立ち上がったとき、私たちはそれを単なる夢として片づけられなくなる。思えば深津篤史にとって、「醒めてみる夢」は重要な鍵ことばだった。

大賞選考　（五十音順）

**うえだ ひろし(リリパットアーミーⅡ)**

**「SHOW劇場」番外編ひとり芝居「怪人二十面相・伝」　怪人二十面相役など**

**玉造小劇店配給芝居「僕と私の遠い橋」 奇太郎役など**

九鬼： 吹田市のメイシアターが、関西の演劇人とクリエイションするシリーズ「SHOW劇場」番外編の一人芝居「怪人二十面相・伝」に主演された。怪人二十面相は二人いる、という北村想さんの着想のもと、１９８９年に刊行された小説の舞台版。

一人芝居の台本は、中心人物の語りを主軸に構成されることが多いが、演出の大熊隆太郎さんとうえだひろしさんにより作成された上演台本は、あえて大人数で演じるような、会話中心の構成とし、３０人近い人物を一人で演じた。

昭和初期の東京が舞台。主要な人物の一人目は、両親が亡くなり、サーカス団に引き取られた少年・平吉。二人目は、彼がサーカス団で出会った天才曲芸師の丈吉。丈吉は歌舞伎の出し物、通称「葛の葉子別れ」から着想を得た芸で人気を博していた。葛の葉姫が狐に変身し、天井に上っていくものだが、丈吉は天幕の天井を突き抜け、天高く消えていくことを夢見ている。平吉はそんな丈吉に憧れる。やがて彼は姿を消し、大泥棒・怪人二十面相となり、名探偵・明智小五郎に勝負を挑む。主要な人物の三人目が明智小五郎だ。

ナレーションも、録音されたうえださんの声で、ラジカセから流れる。舞台には椅子と机、額縁など。衣装替えは最小限とし、額縁に帽子や眼鏡、髭、蝶ネクタイなどを吊り、各人物の愛用するアイテムに顔を近づけて演じる。会話の時は、椅子を動かしながら、無対象の演技も含めて、声色と身体性を、刻々と見事に変化させていく。

後半の、外務省の役人に変装した丈吉＝怪人二十面相と明智小五郎との議論は、特に見応えがあった。丈吉は、自分の家業を芸術と呼び、明智は失笑する。反発し合う二人だが、うえださんの演技は、実は二人は孤独という共通項で共鳴し合っているのではないかと感じさせた。それまで人を食ったように冷静だった明智が、この時だけは感情を露わにし、人間味が溢れる。怒りの表現が激しければ激しいほど、心の奥底では丈吉に共感しているのではないか。観る者のイメージを刺激する演技だった。

また、丈吉の造形が魅力的。丈吉と平吉が直接会話を交わす場面は少ないが、その中で、恐らく家族を持たぬ丈吉が、同じ境遇の平吉に慈愛を込めて接する様が焙り出された。

一言だけの人物も含め、人間像を膨らませて描写されたのが巧みだった。

玉造小劇店配給芝居「僕と私の遠い橋」は、話し方、特に自称詞(一人称)の選び方で性別や年齢、育った環境や立場が表現できる日本語の豊かさと閉鎖性を、喜劇仕立てで表現した作品。言葉の多様性を表現する仕掛けとして、１０回もの転生を繰り返す人物を主軸に、江戸時代から平成までの様々な生活の場面を描いた。

１１人の俳優が、武家、農家、商家など多彩な環境の人物５３役を演じ分ける。うえださんも次から次へと役を演じ分けていかれた。特に大正期の職人・奇太郎役が印象深い。言葉によって、女性は「女らしさ」という役割に閉じ込められるが、男性もまた、苦悩の歴史があることを示唆。貧困層の奇太郎は、生まれ育った環境から、乱暴な言葉を使うことが男らしさとされ、言葉に操られるように素行も乱暴になる。非業の死を遂げるまでの悲哀を、短い場面で演じ切った。

うえださんは、１年間で何十の役を演じられたことか。瞬時に各人物の性格と人生観を表わされるのがお見事。

**趙 清香** **「へカベ、海を渡る」(清流劇場) ポリュクセネ 役**

九鬼： トロイア戦争で陥落したトロイアの王女を演じた。終戦後も風が吹かずギリシア軍はいまだトロイアにとどまっていた。勇者アキレウスの亡霊が生贄を要求していたためだ。その生贄にポリュクセネが選ばれてしまう。母とは異なり、零落した今も王家の威厳を保ち続けるポリュクセネ。自分が生贄にされると聞いても動じず、平常心で死へと旅立つ姿を高貴に演じた。それだけに王女が死んだ瞬間、国から最後の「公」の存在が消えた悲劇を際立たせた。

**中西 由宇佳 (劇団****太陽族)**

**「戻り道に惑う」(劇団****太陽族) 真帆役**

**「迷宮巡礼」(劇団****太陽族) 遠山直美役**

太田：「戻り道に惑う」で中西由宇佳さんが扮した真帆は中学教師。兄の智広が家出少女を誘拐したとされた事件で、決まっていた結婚が破談になった。職業柄、職場でも辛い立場に追い込まれた。それでも肉親として、誘拐ではないという兄の言い分を信用している。それだけに、兄が控訴せずに服役したことが納得できない。

社会的にどうしようもない存在の兄である。そんな兄の人となりを真帆は妹として信じ、気にかけている。だからこそ腹が立つ。真帆のなかにあるそうした葛藤やわだかまりを声の調子、せりふの勢いなどで表現した。

「迷宮巡礼」では、家政婦・直美を演じた。認知症を患うピアニストの茂は、中学の音楽教師・平子と面談中に、失禁してしまう。しかし、自分では分からない。妻の律子がいち早く気づき、茂を退室させて、直美が雑巾で椅子を拭く。しかし、当の茂には失禁した自覚がない。何事もなかったかのように戻ってきて、なぜ椅子をそんなに拭いているのかと直美に問う。直美の表情にさっと動揺がよぎる。茂の質問をそらして、失禁には触れず、声の調子も変えない。説明しても認知症の茂には理解できないかもしれず、失禁を指摘すれば傷つけるだろう…こうした直美の一瞬の判断を言外に表現した。じつに見事な演技だった。

中西さんはここぞとばかり、上手さをひけらかすようなことはしない。役者が上手さを誇示すると、芝居がクサクなるのは周知のことだが、裏返せば、誰もが気づく「上手い」芝居は「クサイ」芝居の一歩手前にあるということである。それゆえに、技術を見せびらかさない中西さんの演技は認められにくい。玄人好みである。もう少し上手さをみせつければどうかと思う反面、今のままでいてほしいという気もする。

九鬼： 「戻り道に惑う」は、実在の少女家出事件から着想。少女を誘拐したとされ、逮捕された男を、８年後に、大人になった彼女が訪ねる設定。中西由宇佳さんは、男=智広の妹を演じた。

　「・・・なんでなん」。この、中西さん演じる妹の第一声から、この芝居に引き込まれる。疑問形ではあるが、明らかに不満を抱えた声色だ。なぜ今頃あの少女＝美波が戻ってきたのか。兄の智広が刑務所から戻り、ようやく平穏が戻り始めたこの時に・・・。何か魂胆があるのか。そんな妹の心配や不満をよそに、智広は少し嬉しそう。アウトローな生き方に憧れる彼は、映画「レオン」に登場する少女マチルダに、美波を重ねる。この作品は、誰が誰に怒りを覚えているか明確だ。真帆は美波に苛立ち、智広の元・妻は、智広への怒りが収まらない。真帆は兄に怒りもするが、理由は控訴しなかったことに対してだ。家出した美波を家に招いたのは、誘拐ではなかったのかもしれないのに。世間的にはダメな男だが、そんな兄を慕い、信じる気持ちもある。そして、彼が迷惑をかけた周りの人々への気遣いも忘れない。

　　　中西さんは生活者の姿をいつも凛々しく演じる。「迷宮巡礼」の家政婦役もそうだが、私達のすぐ隣にいるような、親しみやすい大阪のご婦人像。ごく普通に見える元気いっぱいの人でも、心の中は複雑にいつも動いているものだ。中西さんはリアクションも丁寧で、何に怒り、何に心が安らぎ、何に気を遣っているのか、それがとてもよく伝わり、共感させられ、腑に落ちる。普通の人々を描きながら、大きな社会の動きへと到達する太陽族の舞台には、なくてはならない俳優だ。

**原 竹志(兵庫県立ピッコロ劇団/コトリ会議客員)**

**「おかえりなさせませんなさい」(コトリ会議) 白石礼役**

太田： 原竹志さんが演じたヒューマンツバメの白石は、市役所でヒューマンツバメ登録支援の担当をしている。主舞台となる喫茶「トノモト」はオーナーがいつも不在だ。私にはその喫茶店が、天皇が象徴であるために権力をもった元首＝殿が不在の、「日の本」の比喩のように思えた。その連想で、ヒューマンツバメへの登録が特攻隊への志願に結びついた（これは作者の意図するところではないかもしれない）。白石はヒューマンツバメ製造機に入って変身する際、事故でほとんどの記憶を失い、できそこないになってしまった。そのため、仲間のように大空に雄飛することもなく、致し方なく市役所で働いている。原さんの熱演から、白石の挫折感や悲哀が切実に伝わってきた。

九鬼： 戦争が長引く近未来。燕と人間を合体させた超生物「ヒューマンツバメ」が誕生。原竹志さんが演じるのは、市役所でヒューマンツバメの登録支援の人間側を担当するヒューマンツバメの白石。ただ、彼はヒューマンツバメの出来損ないだと自認する。ヒューマンツバメ製造機にかけられる時、頭をひょいっと動かしてしまったため、燕の思い出も、人間の思い出もほとんど何も残っていないのだ。いつもくよくよと何かを悩み、迷っている。全く「超」ではない。さらにクチバシまでちょん切られ、情けない姿になってしまう。不完全な生物を滑稽に切なく演じ、人間味が溢れる。しかも彼がひょいっと頭を動かしてしまったのには、理由があったようだ。燕の妹のことを忘れたくない。忘れずに必ず妹を迎えに行く。その純粋な想いから、不完全な生き物になってしまった切なさ。時代のスピードに乗り遅れ、まるで迷路の中をさまようような生き様は、現代人のひとつの象徴かもしれない。滑稽さの奥にある複雑な思いを具現化した。

**日永 貴子 「へカベ、海を渡る」(清流劇場) へカベ 役**

九鬼： トロイア戦争で陥落したトロイアの王妃へカベ役。ギリシア軍の総大将アガメムノンの奴隷に身を落とす。夫と息子達を失った上に、末娘のポリュクセネまで生贄にされてしまう。日永貴子さんの造形したへカベ像は、すでに王妃の威厳を失った、ごく普通の母親に見える。大阪弁という生活言語で話すためでもある。それだけに子を失った時の悲しみが、身近な出来事として私達に迫る。そのごく普通のお母さんが、ある瞬間に豹変する。唯一の希望だった隣国で生きているはずの末息子が、すでに殺された後だと知り、復讐という目的に突き進む時、毅然とした強さが身体からみなぎった。戦争によって虐げられた者の怒りと変容。そこから生まれる復讐の連鎖。その悲劇の象徴としてのタイトルロールを見事に演じた。

太田： 私が国内外でみたギリシア悲劇のヘカベは、いずれも王妃らしく高い気位を備え、その多くは痩身の老女だった（ただし、東京芸術劇場「トロイアの女たち」(2012年)で、ふくよかな白石加代子がヘカベを演じたような例もある）。国が敗れて、ヘカベは戦争奴隷となり、夫だけでなく、19人いたと伝えられる子どもたちもすべて失う。王妃としてこれ以上の悲劇はない。高いプライドをもった気高き人が、不幸のどん底へ転落するというのが悲劇の原型であり、ヘカベはまさにそれを体現している。

「ヘカベ、海を渡る」は作品全体が大阪弁に書き直され、日永ヘカベも大阪弁をしゃべる。ギリシア三大悲劇作家のうちで、エウリピデスはどちらかと言えば生活感のある情景を書く。その意味で大阪弁の採用はあながち間違いとは言えないが、原作とはずいぶん隔たった味わいになった。言い換えれば、日永さんは今までにないヘカベを造らなければならなくなった。

日永さんのヘカベも、悲惨な状況に陥ることでは同じである。ただし、日永さんが演じたのは気高い王妃の転落の悲劇ではなかった。母親の悲劇だった。隣国トラキアへ身を寄せていた息子ポリュドーロスが、そこの王ポリュメーストールに殺されたことを知って、ヘカベはポリュメーストールへの復讐へと突き進む。

そこにあるのは、隣国の王の裏切りにたいする、気高き王妃としての憤りではない。我が子を喪った母親としての哀しみと怒りである。大阪弁を駆使することで、王妃の物語のなかに「大阪のオバチャン」が垣間見えた。それによって母親というものの本質がその姿に映し出された。男たちの起こした勝手な争いが、幼い子どもまで犠牲にすることへの母の憤怒が感じられた。

**ボブ・マーサム(THE ROB CARLTON)**

**「THE STUBBORNS」(THE ROB CARLTON)** **バッソ・フェルポーミ役**

九鬼： 深夜に会議が開かれる。昼間に各国のVIP 3人による重要な会議があり、意見が対立。翌日の会議に向け、息子や秘書らが妥協点を見つけるために集まったのだ。ボブ・マーサムさんは、大企業の社長の長男を演じた。母国語が異なり、不得意な外国語で話すために生じる勘違いの喜劇。荒唐無稽な勘違いのアイディアが次々に繰り出される。さらに３０年後、当時を回想する3人の会話では、それぞれが少しずつ記憶違いをしており、彼らの誤った記憶をつなぎ合わせた珍妙なる場面は、さらに抱腹絶倒。ボケとツッコミの笑いではなく、人物全員がへんてこな状況を受け入れ、どんどん前に進んでいくおもしろさ。ボブさんは勿論、村角ダイチさん、高阪勝之さんの３人の出演者全員が巧みであった。巧妙な台詞のパス。そして時々とんでもないシュートを決めるボブさん。アメリカのコメディ映画のテイストを楽しませる喜劇俳優だ。

**山内 佳子（劇団大阪）**

**「親の顔が見たい」（劇団大阪） 長谷部多恵子役**

九鬼： いじめ問題をテーマにした作品。名門女子中学校２年の井上道子が自殺。遺書には「いじめ」の文字と5人の級友の名前が書かれていた。学校は5人の保護者を会議室に集める。

　大きなテーブルで交わされる、教員達と保護者との激論。保護者達は団結し、遺書の信憑性を疑い、自殺を道子の家庭や担任の責任にするなど、皆で次々に責める相手を変えていく。

　子供と、自分の社会的地位を守るためならここまで愚かになれるのか。問題の本質を完全に取り違えた大人達の身勝手な様相を活写。特に上田啓輔さんと山内佳子さんが、歪んだ夫婦関係をリアルに描写した。二人の演じた長谷部夫妻は、ともに他校の教員であり、当初は保護者達の中で最も冷静に見えていた。だが、実は夫が威圧的で、家族に対して支配的な人物であることが次第に表される。妻は抗えないまま、人生を送ってきたのだ。５人の生徒達は全員、いじめの事実を否定するが、それは長谷部の妻が口裏を合わせるよう指示したためだったことが最後にわかる。勤務校での体験から、生徒達が口裏を合わせるのが上手であることを知っていたのだ。

　見る者にとって、共感できる人物はほとんどいないという難しい本。演じる方も大変だっただろう。台詞から価値観を丁寧に掬い取って演じられる。特に山内さんは、台詞がない間のリアクションの表情も丁寧で、様々な葛藤が明確に伝わった。聡明で、本来はバランス感覚のある女性であることがわかる。それが、勤務校でのいじめ問題への対応の難しさや、家庭問題を抱える中で、自分をどんどん曲げていかざるを得なかった悲哀を表現した。

奨励賞選考（五十音順）

**桐子(劇団****太陽族)**

**「迷宮巡礼」(劇団****太陽族) 葉音役**

**「トリビュート1/3」(劇団****太陽族) 女２役**

太田：けっして器用な俳優ではない。手足の長いスリムな身体は俳優として長所だが、せりふにあまり感情が乗らない。今までそう思っていた。

　桐子さんが「迷宮巡礼」で演じた葉音は、ピアニストの道を強要した父に反抗し、今では音楽家として自らの道を切り拓いている。若者らしく、強圧的な父親に反発する言葉には容赦がない。一方、それとは裏腹に肉親としての気持ちも葉音のなかには潜んでいる。母とのやりとりの端々にそうした思いを垣間見せる。せりふに感情がこもるわけではないが、この場合、それがかえって適切な演技になった。

　なるほどこの人はこういう芝居をする人なのかもしれない、と思った。比喩的な言い方になるが、劇団太陽族の俳優は誰もが「武器」をもっており、それを自然なかたちでつかって、人物の感情を表現している。その分、桐子さんの演技が徒手空拳にみえて、平板に感じられたのかもしれない。たまたま今回の役が桐子さんの年頃の俳優にふさわしかった、というご指摘もあろう。だが、この人がじつはこうした「演じない演技」をする人であることを、私は見出したと思っている。その可能性を追いかけてほしいと思う。

九鬼：桐子さんは、大人に対する不信感の強い若者をしばしば演じる。「迷宮巡礼」でも、ピアニストになることを強要した父に対する、強い反発を表した。だが、単なる反発ではなく、その奥に揺らぐ複雑な思いを明確に表現した。葉音という女性は、子供の頃から心の許せる大人＝家政婦がいたことで、自分を保つことができたようだ。それが演技のよりどころにもなったのか、心の動きがとてもわかりやすく伝わった。父を目の前にすると憎まれ口をきいてしまうのだが、心の中では父のことを気にかけている。音楽への入り口を開いてくれた父への感謝の気持ちも言葉にすることができる。しかし自分がやりたいことはクラシックではないとはっきり言うこともできて、自分の道を突き進む。ライブハウスでウッドベースを生演奏する姿も、自立するアーティストの人間的な魅力に溢れていた。

**吉田 凪詐（コトリ会議/うさぎの喘ギ）**

**「おかえりなさせませんなさい」（コトリ会議） 山生椋尾役**

九鬼：今から１００年後。第八次世界大戦が尾を引く第八次半世界大戦が勃発。人類はおろか世界中の生き物が疲弊する中、燕と人間を合体させた超生物「ヒューマンツバメ」が誕生するという設定。死なない生き物で、子供を産む必要もない。だが人間の頃の記憶は少ししか残らない。そんな中、山生家の長女・飛代の夫に召集令状が届く。徴兵を逃れるために夫婦揃ってヒューマンツバメになると言い出し、愕然とする家族。飛代の弟・椋尾を吉田凪詐さんが演じた。当初は、年の離れた妹の愛実と愛し合っているように見えるのだが、それは愛実の片思いで、実は椋尾は飛代を愛していた。飛代のために、自分が身代わりとなりヒューマンツバメになろうとするが、先に愛実がヒューマンツバメになってしまう。

生まれた時から戦争の中で生きてきたことにより、家族に強い執着を持つ複雑な関係性。過去と現在、そして人間とツバメ、さらにヒューマンツバメの世界が交錯する、複雑な構造。台詞以外のあらゆる表現＝空間演出や照明、俳優の演技など、すべてをトータルで鑑賞することで理解が深まる世界観。俳優の身体を通して明確になる戯曲だ。吉田さんの演技は、観る者の戯曲の理解を深める。椋尾は本音も言い、また本音でないことも言うのだが、吉田さんの演技からは、本音を言わなくても、何が本音かがはっきりと伝わり、彼が舞台から去った後も、部屋の外で起きていることを想像させる。この芝居の推進力になっていた。

（文中一部敬称略）

**過去の受賞者**

第一回　１９９８（平成１０）年

**男優賞**　森本 研典（１９９Q太陽族、現・劇団太陽族）

**女優賞**　江口 恵美（桃園会）

岸部 孝子（１９９Q太陽族、現・劇団太陽族）

**奨励賞**　森川 万里（桃園会）

**特別賞**　集団演技賞　南河内万歳一座

第二回　１９９９（平成１１）年

**男優賞**　荒谷 清水（南河内万歳一座）

金替 康博（MONO）

南 勝（１９９Q太陽族、現・劇団太陽族）

**女優賞**　増田 記子（MONO）

**奨励賞**　中村 美保（劇団八時半）

第三回　２０００（平成１２）年

**男優賞**　工藤 俊作（１９９Q太陽族）

水沼 健（MONO）

**女優賞**　生田 朗子（リリパットアーミー）

中村 美保（劇団八時半）

**奨励賞**　北村 守（スクエア）

第四回　２００１（平成１３）年

**男優賞**　亀岡 寿行（桃園会）

**女優賞**　内田 淳子

比嘉 世津子（劇団犯罪友の会）

**奨励賞**　武田 暁

田矢 雅美（劇団太陽族）

第五回　２００２（平成１４）年

**男優賞**　 風太郎

**女優賞**　西野 千雅子（MONO）

藤野 節子（桃園会）

**奨励賞**　前田 有香子（劇団太陽族）

**特別賞**　佳梯 かこ

第六回　２００３（平成１５）年

**男優賞**　奥村 泰彦（MONO）

玉置 稔（劇団犯罪友の会）

や乃えいじ（PM／飛ぶ教室）

**女優賞**　内田 淳子

**奨励賞**　岩松 高史（桃園会）

第七回　２００４（平成１６）年

**男優賞**　川本 三吉（劇団犯罪友の会）

紀伊川 淳（桃園会）

菊谷 高広（遊劇体）

**女優賞**　はたもと ようこ（桃園会）

**奨励賞**　原 真（水の会）

第八回　２００５（平成１７）年

**男優賞**　尾方 宣久（MONO）

**女優賞**　加納 亮子（桃園会）

川田 陽子（くじら企画）

武田 操美（鉛乃文檎）

**奨励賞**　河本 久和（空の驛舎）

第九回　２００６（平成１８）年

**男優賞**　奇異 保（兵庫県立ピッコロ劇団）

はしぐち しん（コンブリ団）

**女優賞**　大熊 ねこ（遊劇体）

中田 彩葉（劇団犯罪友の会）

**奨励賞**　山田山 未舟（劇団犯罪友の会）

第十回　２００７（平成１９）年

**男優賞**　二口 大学（演劇ユニット昼ノ月）

**女優賞**　岸部 孝子（劇団太陽族）

条 あけみ（あみゅーず・とらいあんぐる）

**奨励賞**　該当なし

第十一回　２００８（平成２０）年

**男優賞**　 F．ジャパン（劇団衛星）

**女優賞**　亀井 妙子（兵庫県立ピッコロ劇団）

こやま あい（遊劇体）

**奨励賞**　該当なし

第十二回　２００９（平成２１）年

**男優賞**　金城 左岸（劇団犯罪友の会）

原 真（水の会）

**女優賞**　森川 万里（桃園会）

**奨励賞**　該当なし

第十三回　２０１０（平成２２）年

**男優賞**　秋月 雁

村尾 オサム（遊劇体）

**女優賞**　武田 暁（魚灯）

**奨励賞**　該当なし

第十四回　２０１１（平成２３）年

**男優賞**　戎屋 海老

田中 遊

**女優賞**　中田 彩葉（劇団犯罪友の会）

**奨励賞**　該当なし

第十五回　２０１２（平成２４）年

**男優賞**　孫　高宏（兵庫県立ピッコロ劇団）

三浦 隆志（南河内万歳一座）

**女優賞**　今井 佐知子（兵庫県立ピッコロ劇団）

**奨励賞**　寺本 多得子（桃園会）

第十六回　２０１３（平成２５）年

**男優賞**　川本 三吉（犯罪友の会）

**女優賞**　はたもとようこ（桃園会）

**奨励賞**　阪田 愛子（桃園会）

第十七回　２０１４（平成２６）年

**男優賞**　土田 英生（MONO）

　橋本 健司（桃園会）

**女優賞**　平井 久美子（兵庫県立ピッコロ劇団）

**奨励賞**　該当なし

第十八回　２０１５（平成２７）年

**男優賞**　蟷螂 襲 （PM／飛ぶ教室）

三田村 啓示（空の驛舎）

**女優賞** 福井 玲子（PM／飛ぶ教室）

**奨励賞** 浜 志穂 （劇団大阪）

第十九回　２０１６（平成２８）年

**男優賞** 該当なし

**女優賞** 阪本 麻紀 （烏丸ストロークロック）

得田 晃子

野秋 裕香（兵庫県立ピッコロ劇団）

**奨励賞** 上木 椛 （劇団犯罪友の会）

第二十回　２０１７（平成２９）年

**男優賞** 緒方 晋（The Stone Age）

孫 高宏（兵庫県立ピッコロ劇団）

**女優賞** 林 英世

**奨励賞** 松原 由希子（匿名劇壇）

第二十一回　２０１８（平成３０）年

**男優賞** 髙口 真吾

**女優賞** 金子 順子（コズミックシアター）

**奨励賞** 古谷 ちさ（空晴）

第二十二回 ２０１９(令和元)年

**男優賞** 鈴村 貴彦 (南河内万歳一座)

**女優賞** 水谷 有希

森 万紀 (兵庫県立ピッコロ劇団)

**奨励賞** 松原 佑次 (遊劇舞台二月病)

第二十三回 ２０２０(令和２)年

**大　賞** はたもと ようこ (桃園会)

風太郎 (兵庫県立ピッコロ劇団)

**奨励賞** 田渕 詩乃 (兵庫県立ピッコロ劇団)

第二十四回 ２０２１(令和３)年

**大　賞** 梅田 千絵 (関西芸術座)

橋本 浩明

三坂 賢二郎 (兵庫県立ピッコロ劇団)

**奨励賞** 該当なし

第二十五回 ２０２２(令和４)年

**大　賞** 樫村 千晶(兵庫県立ピッコロ劇団)

中川 浩三（Z system）

**奨励賞** 趙 沙良

第二十六回 ２０２３(令和５)年

**大　賞** 金子 順子 (コズミックシアター)

髙安 美帆 （エイチエムピー・シアターカンパニー）

原 竹志 (兵庫県立ピッコロ劇団)

**奨励賞** 荷車 ケンシロウ(劇団不労社)

＊各回とも敬称略、五十音順、（ ）内は受賞時の所属劇団名

編集：片山 加菜